Focus 1
英語教育改革の先を見据えて

進研ゼミ 英語4技能教材の開発

子どもたち一人ひとりに“使える”英語が身に付く教材を

本プロジェクトメンバーのインタビュー記事を掲載しています
https://www.benesse-hd.co.jp/ja/ir/library/ar/2019/focus/index.html

家庭学習支援の知見とノウハウで英語教育の変化に対応する教材をつくる

教育は、子どもたちが将来社会で活躍していくのに必要な力を育てるものです。グローバル化や技術革新が急速に進む社会に生きる子どもたちには、今まで以上に主体的に考え、他者と協働しながら未来を切り拓いていく力が求められており、これを後押しするものとして教育・入試改革も進められています。

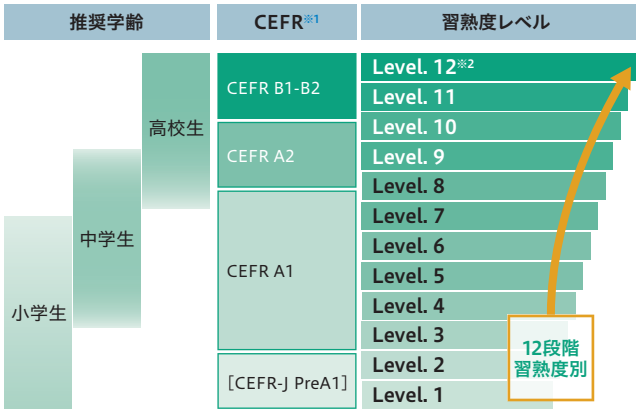
こうした方向性が重視されるなか、英語教育もドラスティックに変わります。2021年度から始まる大学入試改革では、これまでの「読む」「書く」だけでなく、「聞く」「話す」を加えた4つの技能が総合的に評価されます。日本語と同じように英語を使い、海外の人々としっかりコミュニケーションをとれる人材が求められているのです。

ベネッセが2019年4月にリリースした「英語4技能習熟度別トレーニング」は、進研ゼミの受講者を対象に、受講費内で継続的に提供するデジタル学習サービスです。ベネッセは、進研ゼミを通じて自学自習の要である家庭学習を長く支援してきました。英語教育の変化に対しては、保護者の方から不安や戸惑いの声も聞かれていますが、そうした声に応えるために英語4技能トレーニングの開発に取り組んできました。

受講者一人ひとりに寄りそい着実な習熟度向上をサポート

英語4技能トレーニングは、技能レベルの異なる受講者一人ひとりが「今できる」レベルからステップアップできるように設計しています。その最大の特長は、従来の学齢別での教材ではなく、英語技能の習熟度に応じて12段階に区分してサービスを提供する点です。診断テストをもとに受講者一人ひとりの英語レベルを診断し、各自に合わせたレッスンを提案しています。日本の小学校では、2020年から小学3・4年生で英語に親しむ「外国語活動」がスタートし、小学5・6年生で「教科」としての英語の授業が始まります。

12段階習熟度別トレーニングフロー



※1 外国語の運用能力を測定する欧州の規格
※2 Level.12は2020年に向けて開発中

「教科」としての英語には、成績がつくようになります。現時点ではこれまでの学習機会などによって同じ学年の子どもでも、英語力にはかなりの差異があります。そのため、「今できる」レベルから始められる習熟度別の教材は、英語力を効果的に伸長させるツールとして期待されています。

さらに、“アウトプット重視”の教材であることも特長です。講師との双方向のコミュニケーションを図れるようにしたことで、思いや考えを整理して自分の言葉で発信することを促しています。

また、受講者が着実に英語力を身に付けられる学習サイクルを設計。診断テストの結果から自らの到達目標を設定、いつ、どのように教材を使えばいいか、といったところまで細やかな提案も行い、着実に英語を身に付けられる学習サイクルとして支えています。進捗や習熟度によってはより最適なレベルを再度判断してフォローするなど、受講者が一人でつまずかないような工夫をしています。

英語を4技能で学べる教材は他社でも提供していますが、このように小学生から高校生まで一貫したサービスで受講者一人ひとりを継続的に支援できるのはベネッセならではの大きな強みです。これまで蓄積してきた教材開発や、学力のアセスメントに関するノウハウ・知見を融合して、受講者の学習をきめ細やかに支えています。

リリース直後から大きな反響 受講者の活用も着実に進む

リリース直後から英語4技能トレーニングは大きな反響をいただいています。また、利用動向データの蓄積も進んでいますが、当初の想定以上に実際の活用が進んでいることもわかっています。

例えば、小学校1年生の起動率は50%超となっています。英語の必修化を控え、多くの保護者の方から支持を得られている結果であると分析しています。

一方で、受講者数をさらに拡大していくために、取り組むべき課題も見えてきています。中高生の受講者からは、英語4技能検定対策や受験対策として活用したいという要望が寄せられていることから、検定のタイミングに合わせて、検定特有の形式に対応できるよう外国人講師によるマンツーマンのオンラインレッスンを提供していきます。また、診断テストについて、過去のデータを分析し、少ない設問でも精度の高い判定ができるよう改良を進めています。

真に役立つ英語教材として 進化を図っていくために

ベネッセは、進研ゼミや年間90万回以上の英会話のオンラインレッスンを提供し、受講者の回答データや、外国人講師との対話データをはじめ、膨大な学習履歴を蓄積しています。こうしたデータと顧客基盤も活かして、さらなる進化を図っていきます。段階的に、AIとの対話による学習なども導入していきます。英語の発話能力を伸ばしたくても、外国人講師との会話にハードルを感じる子どもたちもいます。そこで例えば、英語を話すAIのキャラクターがその受講者に合った話題を提供することで、英語での会話への抵抗感をなくすこともできます。

教材は、検定や入試でのスコアアップ対策を一層充実させていきますが、あくまでそれは一面です。「子どもたちの未来に役立つ力を育む」。今後もベネッセは、その強い信念のもと、受講者や保護者の方の声に耳を傾けながら、蓄積される学習データを活用して、すべての受講者が使える英語を身に付ける教材として英語4技能学習を進化させていきます。

チェックテストによって習熟度レベルを診断

検定別に目標設定し、計画的な学習を支援

有料で外国人講師による個別指導を受けられるオンラインスピーキングを提供

(株)ベネッセコーポレーション
学校ICT事業開発部
Classiマーケティング課 兼
Classi(株) マーケティング部
エリアマネージャー
石川 翔一

秋田県立
能代高等学校
進路指導主事
吉田 英亮 先生

Focus 2
教育改革の
先を見据えて

秋田県立能代高校 Classiの導入

“主体的に学ぶ力”を育む、学校教育の新たなカタチへ

“地域の進学校”が目指す学校のこれから

教育改革の一環として、2020年度の大学入試から国語における記述式や英語の4技能(聞く・読む・話す・書く)検定の受検が必要となる大学が増え、これまで以上に“学んだ知識を定着させ、アウトプットする力”が重視されるようになります。こうした新時代の教育が求められるなかでICTを活かした教育プラットフォーム「Classi」を導入する学校が増えています。秋田県の進学校である秋田県立能代高校も、そうした学校の一つでした。

「以前から、私たちは生徒に主体的に考えさせ、対話の中で学んでいく『探究活動』を取り入れてきました。それらに役立つ機能が入っていることが魅力でした」と、同校の進路指導主事である吉田英亮先生はClassiを採用した理由を話します。

Classiを使って「つながる・振り返る・高め合う」

「探究活動」とは、自ら課題を発見し、その課題を解決するためのプロセスを体験しながら学んでいく力を育むもので、2022年度からは高等学校学習指導要領の中で「探究」という名がつく科目が新設されます。能代高校は、2017年に秋田県から「探究活動等実践モデル校事業」に指定されたのを機に、一足先に「地域課題解決型の探究活動」などを進めてきました。

「Classiを導入してから、探究活動で重視している『つながる』『振り返る』『高め合う』ことが円滑になりました」(吉田先生)

秋田県立能代高校でのClassi活用

「つながる」に役立っているのはClassiのコミュニケーション機能です。校内でのグループ学習はもちろん、他校との協働学習を可能にし、生徒の学びをより深めることができています。また、「振り返る」には、ポートフォリオ機能を活用しています。Classiは、生徒たちがスマートフォンなどから、探究活動の成果や自身の気付きなどを気軽に入力・蓄積することができるほか、どのようなことを学んできたのかという振り返りも容易になります。また、先生もそのデータをもとに適切な面談・指導や評価が可能になります。そして「高め合う」には、上記に加えて、アンケートや投票ボックス機能を使っています。アンケートを活用した生徒同士の相互評価や情報共有のほか、ほかの生徒が発表した内容に関する感想を書き込むなどの対話を促しています。

こうした機能を活用して、同校では探究活動以外の授業の学習記録や連絡用掲示板としてもClassiを使い始めています。

学習記録と振り返りをスマートフォンで

グループワークでの気付きや学びを記録

先生は、生徒が記録したものを随時確認することが可能

その場でのアンケート集計で講義の質を向上

子どもたちの“学びの輪”を広げるために

Classiは、先生に寄りそい、改革が進む教育現場の課題解決をお手伝いしながら進化してきたICTツールです。これまでベネッセが提供してきた進研模試やスタディーサポートといったアセスメントとの連携によって、生徒の個別情報をより網羅的に蓄積でき、学習指導や進路指導をサポートするツールとなっています。

また、今後は、より協働的な学びを実現していくために、学校間の連携を容易にする新機能の搭載も検討しています。これが実現すれば地域間の教育格差や情報格差の是正にもつながります。

子どもたちの可能性を引き出し、新しい学びの場を提供するために、これからも教育プラットフォームを進化させていきます。

本プロジェクトについてわかりやすく動画とHTML記事で紹介しています
https://www.benesse-hd.co.jp/ja/ir/library/ar/2019/focus/classi.html

VOICE

紙の時と比べると、
生徒の記録・意見記入の量が断然多い！
今の世代に合っていると感じる。

先生 **Aさん**

他の人の意見や感想がすぐに共有できるので、
相互対話によるより深い学びにつながっている。

先生 **Bさん**

学年末などに学習記録を見返して、
自分の成長を見える化できるのが良いです。

高校3年生 **Cさん**

大学や他校とのやりとりが簡単にでき、
いろんな物の見方や考え方が得られ視野が広がる。

高校2年生 **Dさん**

ICTで学校を支援し、日本の教育を変えたい

Classi（株）取締役
（株）ベネッセコーポレーション
デジタル事業開発本部 本部長
井上 寿士

Classi（株）は、「子どもの無限の可能性を解き放ち、学びの形を進化させる」ことをミッションとしています。今後の社会で必要になる力を学校という場を通じてしっかりと学んでもらえるように、学校教育の新たなカタチの支援に積極的に取り組んでいます。

例えば、能代高校の取り組みに代表されるように、「Classi」のグループ機能を活用することで、地域の方や外部のプロフェッショナルとやり取りしたり、県外の学校同士が協働学習したりするなど、学校を越えた開かれた学びも生まれつつあります。

他の仲間からのフィードバックをもらう、学校を越え新たな気付きや学びを深める。ICTを活用することにより実現する学びや、「Classi」だからこそできる、子どもの可能性を引き出す学びを、今後も増やしていきたいと考えています。

サービスナビゲーションシステムは、公益社団法人企業情報化協会が主催する「平成30年度IT賞」において、介護業界の未来を変化させる可能性のあるシステムとの評価を受け、「ITビジネス賞」を受賞しました。

(株)ベネッセスタイルケア
執行役員
サービス推進本部
本部長
祝田 健

(株)ベネッセスタイルケア
介護Ⅱエリアカンパニー
東京Ⅰエリア事業本部
サービスナビゲーション
システム研修担当
原田 武将

Focus 3
要介護者の
増加を見据えて

サービスナビゲーションシステムの導入

ベネッセメソッドで介護現場の未来を変える

システム開発の根幹にあるのは「介護はクリエイティブな仕事」という信念

ベネッセスタイルケアは、介護現場のサービススタイルを変革する介護・看護記録プラットフォーム「サービスナビゲーションシステム」を、2017年に自社開発しました。2012年に開発プロジェクトをスタートし、さまざまな検証を重ねながら、5年の歳月をかけて本格的に導入を開始。現在は、リレ2拠点を除き全国に約320あるすべてのホームで導入し、1万6,000名を超えるご入居者さまへのサービスに活用しています(2019年8月時点)。

サービスナビゲーションシステムの根幹にあるのは、「介護はクリエイティブな仕事」であるというベネッセスタイルケアの信念です。介護の仕事は、専門的な知識や技能を必要とします。そして、介護スタッフや看護スタッフ、ケアマネジャー、機能訓練指導員などがチームを組んで、ご入居者さまお一人おひとりが、その方らしい生活を送れるようサービスをつくり出していく仕事です。こうした信念があることから、開発にあたっては生産性の向上だけをゴールとするのではなく、介護サービスの質を高めていくツールとすることを最も重視しました。

大きな特長は、日々蓄積されるご入居者さまのケアに関するさまざまなデータをもとに、PDCAを回してこれまでになかったようなサービスを構築していける点であり、サービスナビゲーションシステムはまさに介護スタッフのクリエイティビティを加速させていくツールなのです。

スタッフの“気付き”と“行動”によってご入居者さまのQOL向上を実現していく

これまで介護の現場では、フロアに記録用紙を保管し、そこにスタッフがご入居者さまのお名前や「食事」「水分摂取」などの記録を書き込んでいました。そのため、記録作業にも確認作業にも多くの時間をとられていました。これに対して、サービスナビゲーションシステムでは各フロアにあった情報を一元管理しているため、パソコンやスマートフォンでいつでも情報を閲覧・共有することが

できます。端末の画面にタッチするだけで実施したケアの内容を簡単に入力でき、ご入居者さまの状態はわかりやすくアイコンで表示されます。

ただし、このシステムは単にアナログだった作業をデジタルに置き換えることを目的としたものではありません。その名のとおり、「スタッフの業務をよりクリエイティブなものへと導く(=ナビゲーションする)」ことがシステム導入の意義で、スタッフの“気付き”を促し、“行動”を変えるきっかけとなることを目指しています。一定期間におけるご入居者さまの体重の変化や、お一人おひとりの留意点など、サービスナビゲーションシステムが知らせてくれる情報を踏まえてスタッフがサービスを行うことで、QOL(生活の質)の向上を実現していきます。

提供すべきケアが
タイムテーブル上にアイコンで一覧化

ホーム内でのコミュニケーションから新たな“気付き”が生まれる

サービスナビゲーションシステムの導入により、ベネッセスタイルケアの介護の現場は大きく変化しています。例えば、スタッフ同士のコミュニケーションが従来以上に活発化し、そこから生まれた新たな気付きをスタッフ一人ひとりが実践につなげています。

サービスナビゲーションシステムの5つの特徴

❶生産性向上
❷コンプライアンス
❸情報共有・連携
❹ご入居者さまへの“気付き”の醸成
❺事故再発防止

また、事故が起きた際に以後の再発防止対策をステップに沿って記録・検証する機能も備えており、事故の未然防止にもつながっています。介護保険上で必要な手続きとなるケアプランの更新時期もよりわかりやすくなりました。ご入居者さまの生活の状況やケアにおいて留意すべき事項が詳細かつ確実に記録できるようになったため、すべてのスタッフがその情報をいち早く共有し、より適切な対応を行っています。

もちろん、業務の生産性や効率の面でも効果が生まれています。記録用紙や申し送りを確認する時間などが削減され、情報の共有・連携もスムーズになっています。各スタッフは、こうした業務に使っていた時間をケア方法の見直しやご入居者さまと関わる時間に充てるなど、ホーム全体でサービスのさらなる改善・向上を図っています。

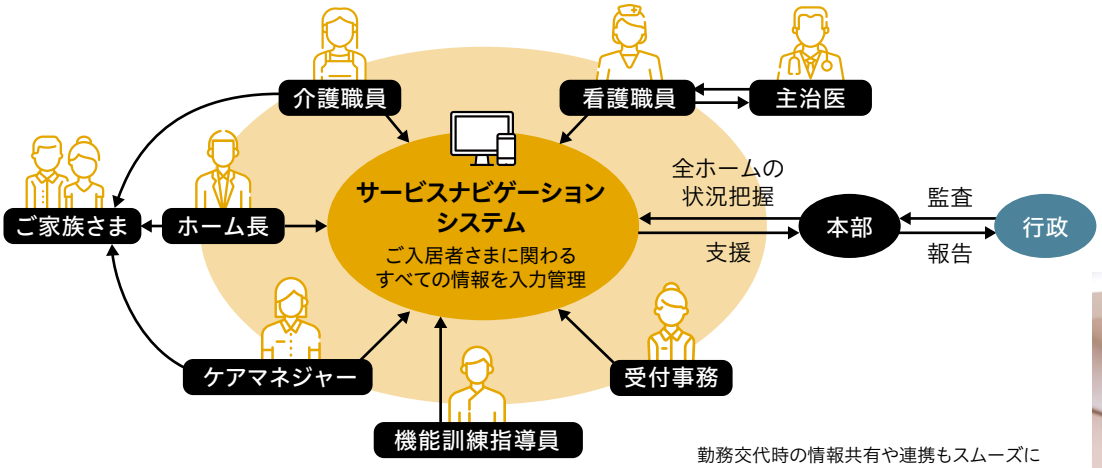
介護業界をあるべき未来へ導く推進役として

ベネッセスタイルケアは、ご入居者さまに寄りそい、その方が望む生活をサポートし続ける——そんな介護サービスのあるべき姿を追求するためのツールとして、今後もサービスナビゲーションシステムを進化させていきます。例えば、蓄積したデータを分析して、事故の削減を図っていく、他のITソリューションとつなげて介護業務の正確性や効率を上げるといった取り組みも進めていきたいと考えています。

介護業界をあるべき未来へ導くというビジョンを掲げ、サービスナビゲーションシステムの進化・活用を通じて、業界の推進役となっていきます。

本プロジェクトについてわかりやすく
動画とHTML記事で紹介しています
https://www.benesse-hd.co.jp/ja/ir/library/ar/2019/focus/service.html

サービスナビゲーションシステムによる情報共有と職種連携



勤務交代時の情報共有や連携もスムーズに

スマートフォンで情報を確認・記入